

[B年] 待降節第2主日(2021年12月5日)**【旧約聖書日課】 エレミヤ書 36章1～10節**

1 ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの第四年に、次の言葉が主からエレミヤに臨んだ。2 「巻物を取り、わたしがヨシヤの時代から今日に至るまで、イスラエルとユダ、および諸国について、あなたに語ってきた言葉を残らず書き記しなさい。3 ユダの家は、わたしがくだそうと考えているすべての災いを聞いて、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。そうすれば、わたしは彼らの罪と咎を赦す。」

4 エレミヤはネリヤの子バルクを呼び寄せた。バルクはエレミヤの口述に従って、主が語られた言葉をすべて巻物に書き記した。5 エレミヤはバルクに命じた。「わたしは主の神殿に入ることを禁じられている。6 お前は断食の日に行き、わたしが口述したとおりに書き記したこの巻物から主の言葉を読み、神殿に集まった人々に聞かせなさい。また、ユダの町々から上って来るすべての人々にも読み聞かせなさい。7 この民に向かって告げられた主の怒りと憤りが大きいことを知って、人々が主に憐れみを乞い、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。」8 そこで、ネリヤの子バルクは、預言者エレミヤが命じたとおり、巻物に記された主の言葉を主の神殿で読んだ。9 ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの治世の第五年九月に、エルサレムの全市民およびユダの町々からエルサレムに上って来るすべての人々に、主の前で断食をする布告が出された。10 そのとき、バルクは主の神殿で巻物に記されたエレミヤの言葉を読んだ。彼は書記官、シャファンの子ゲマルヤの部屋からすべての人々に読み聞かせたのであるが、それは主の神殿の上の前庭にあり、新しい門の入り口の傍らにあった。

【使徒書日課】 テモテへの手紙二 3章14節～4章8節

3 14 だがあなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、15 また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。16 聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。17 こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです。

4 1 神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国を思いつつ、厳かに命じます。2 御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるの

です。3 だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、4 真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります。5 しかしあなたは、どんな場合にも身を慎み、苦しみを耐え忍び、福音宣教者の仕事に励み、自分の務めを果たしなさい。6 わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。7 わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。8 今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。

【福音書日課】 マルコによる福音書 7章1～13節

1 フェリサイ派の人々と数人の律法学者たちが、エルサレムから来て、イエスのもとに集まった。2 そして、イエスの弟子たちの中に汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者がいるのを見た。3 —フェリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないで食事せず、4 また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないで食事をしない。そのほか、杯、鉢、銅の器や寝台を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある。—5 そこで、フェリサイ派の人々と律法学者たちが尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」6 イエスは言われた。「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。

『この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。』

7 人間の戒めを教えとしておしえ、むなしくわたしをあがめている。』

8 あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」9 更に、イエスは言われた。「あなたたちは自分の言い伝えを大事にして、よくも神の掟をないがしろにしたものである。10 モーセは、『父と母を敬え』と言い、『父または母をののしる者は死刑に処せられるべきである』とも言っている。11 それなのに、あなたたちは言っている。『もし、だれかが父または母に対して、「あなたに差し上げるべきものは、何でもコルバン、つまり神への供え物です」と言えば、12 その人はもはや父または母に対して何もしないで済むのだ』と。13 こうして、あなたたちは、受け継いだ言い伝えて神の言葉を無にしている。また、これと同じようなことをたくさん行っている。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 36章1～10節

1ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの治世第四年に、次の言葉が主からエレミヤに臨んだ。2「巻物を取り、私があるに語った日から、すなわちヨシヤの時代から、今日に至るまで、イスラエルとユダ、およびすべての国々について、私があるに語ってきた言葉を残らず書き記しなさい。3ユダの家は、私が彼らに下そうと考えているすべての災いを聞いて、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。そうすれば、私は彼らの過ちと罪を赦す。」

4エレミヤはネリヤの子バルクを呼び寄せた。バルクはエレミヤの口述に従って、主が彼に語られた言葉をすべて巻物に書き記した。5エレミヤはバルクに命じた。「私は閉じ込められていて、主の神殿に入ることができない。6あなたは断食の日に行って、私が口述したとおりに書き記したこの巻物の中から主の言葉を読み上げて、神殿にいる民に聞かせなさい。また、それぞれの町から来るすべてのユダの人々にも読み聞かせなさい。7人々は主の前に願いを献げ、それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない。この民に主が語られた怒りと憤りが大きいからだ。」8そこで、ネリヤの子バルクは、すべて預言者エレミヤが命じたとおりに、巻物に記された主の言葉を主の神殿で読み上げた。

9ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの治世第五年、第九の月に、エルサレムのすべての民、およびユダの各地の町からエルサレムに来ているすべての民は、主の前で断食をすることを呼びかけた。10バルクは主の神殿で、巻物に記されたエレミヤの言葉を読み上げた。彼は書記官であるシャファンの子ゲマルヤの部屋からすべての民に読み聞かせたのだが、その部屋は主の神殿の上の庭の、新しい門の入り口の傍らにあった。

テモテへの手紙二 3章14節～4章8節

3 14だがあなたは、自分が学んで確信した事柄にとどまっていなさい。あなたは、それを誰から学んだかを知っており、15また、自分が幼い頃から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに至る知恵を与えることができます。

16聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたもので、人を教え、戒め、矯正し、義に基づいて訓練をするために有益です。17こうして、神に仕える人(真訳→神の人)は、どのような善い行いをもできるように、十分に整えられるのです。

4 1神の前で、そして生きている者と死んだ者とを裁かれるキリスト・イエスの前で、その出現(→顕現)と御国とを思い、私は厳かに命じます。2御言葉を宣べ伝

えなさい。時が良くても悪くても、それを続けなさい。忍耐と教えを尽くして、とがめ、戒め、勧めなさい。3誰も健全な教えを聞こうとしない時が来ます。その時、人々は耳触りのよい話を聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、4真理から耳を背け、作り話へとそれて行くようになります。5しかしあなたは、何事にも身を慎み、苦しみに耐え、福音宣教者の働きをなし、自分の務めを全うしなさい。

6私自身は、すでにいけにえとして献げられており、世を去るべき時が来ています。7私は、闘いを立派に闘い抜き、走るべき道のを走り終え、信仰を守り通しました。8今や、義の冠が私を待っているばかりです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるでしょう。私だけでなく、主が現れるのを心から待ち望むすべての人に授けてくださるでしょう。

マルコによる福音書 7章1～13節

1ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちが、エルサレムから来て、イエスのもとに集まった。2そして、イエスの弟子たちの中に、汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者がいるのを見た。3——ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを守り、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず、4また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、水差し、銅の器や寝台を洗うことなど、守るべきこととして受け継いでいることがたくさんあった。——5そこで、ファリサイ派の人々と律法学者たちが尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか。」6イエスは言われた。「イザヤは、あなたがた偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。

『この民は唇で私を敬うが、その心は私から遠く離れている。』

7 空しく私を崇め

人間の戒めを教えとして教えている。』

8あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」9また、言われた。「あなたがたは、自分の言い伝えを重んじて〔異本→守って〕、よくも神の戒めをないがしろにしたものである。10モーセは、『父と母を敬え』と言い、『父や母を罵る者は、死刑に処せられる』と言っている。11それなのに、あなたがたは言っている。『もし、誰かが父または母に向かって、「私にお求めのものは、コルバン、つまり神への供え物なのです』と言えば、12その人は父や母のために、もう何もしないで済むのだ』と。13こうして、あなたがたは、受け継いだ言い伝えで神の言葉を無にしている。また、これと同じようなことをたくさん行っている。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・12月5日「待降節第2主日」の日課主題は「旧約における神の言」。旧約日課は、「エレミヤ書」から、預言者エレミヤが書記官バルクに自らの告げる預言を巻物に書き記して然るべき時に人々に聞かせるよう命じる箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙二」から、使徒パウロが若い伝道者テモテに対して「聖書」の御言葉に信頼した福音宣教者として励むべきことを教える箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、ファリサイ派の人々が主イエスの弟子たちの振る舞いを批判するのに対して主イエスがファリサイ派の人々の「律法」に対する姿勢をご都合主義と批判する箇所。

旧約日課(エレミヤ 36 章より)

・「エレミヤ書」は、ヘブライ語正典「後の預言者」の第二巻に置かれた預言書。地方聖所の祭司出身で、前7世紀の南王国ヨシヤ王時代におこなわれた改革の担い手となった祭司・預言者集団に参画し「預言者」として登用されるが、ヨシヤ王没後は不遇となり、王国滅亡まで反主流派の預言者として預言活動を続け、滅亡後はエジプト亡命集団に連れられて行き、エジプトで没したとされる。エレミヤは、在野の預言者として迫害されたわけではなく、ヨシヤ王時代に王宮預言者として登用されて以来、体制内でその地位を保証されてきた人物であるため、宮廷書記官がその発言や活動を記録することになったと考えられる。

・エレミヤの専属書記官であったと推察されるのがバルクで、王国滅亡後、バビロン捕囚時代を越えてエレミヤらの預言者の伝統を後世に伝え、捕囚後の正典編纂への道筋を付ける役割を果たしたと推察される。「旧約統編」に「バルク書」があり、王国滅亡後にバルクはバビロン捕囚組に合流したことが示されている。

・「エレミヤ書」は、エレミヤの預言集と共に、日課箇所のようなエレミヤの預言活動の叙述を中心とした歴史記述が不規則に現れる。それらは、「列王記」が詳述しないヨシヤ王没後の王国滅亡に至る経緯を知る手がかりとなっている。

・1節「ヨシヤの子ヨヤキムの第四年」は、前605年頃、ヨシヤ王の戦死から四年後のこと。ヨシヤ王は、アッシリア帝国末期、代わりに台頭してきてアッシリアの首都をすでに征服したバビロニアおよびメディアの連合軍と連携して反アッシリア包囲網を形成しようとしていたが、アッシリア亡命政府軍が最後の首都奪還作戦を遂行するに当たりエジプトに援軍を求めたため、これを阻止しようとして北進するエジプト軍と対峙し、戦死した(王下 23:29 以下)。南王国宮廷はヨシヤ王の嫡男ヨアハズを後継王に戴くが、エジプト王ファラオ・ネコがこれを許さず、ヨアハズを退位させて代わりに傀儡王として立てたのが別の王子であったヨヤキム王である。ヨヤキム王は親エジプト政治を進めるが、ヨシヤ王は親バビロニアであったため、ヨシヤ王時代の宮

廷官吏は排斥され、エレミヤらヨシヤ王のもとで登用されていた預言者らも失脚することになった。しかし、エレミヤらはエルサレム神殿祭司団を基盤としていたため完全に排除されることはなかったのだろう。この「ヨヤキムの第四年」は、バビロニア王ネブカドネツアルがメソポタミアに進軍してきていたファラオ・ネコのエジプト軍を「カルケミシュの戦い」で撃ち破った年(エレ 46:2)。それによって、親エジプト政権のヨヤキム王宮廷には動揺がもたらされ、「主の前で断食をする布告」(9節)が出されたと推察される。

・エレミヤがバルクに書き記させた「主の言葉の巻物」を神殿で読み聞かせたと描かれるのは、ヨシヤ王時代の改革の発端となった神殿における「律法の書」の発見とヨシヤ王への読み聞かせという出来事(王下 22章)と対比的に描写するためだろう。朗読された場所として記されるところの「シャファン」は、ヨシヤ王の書記官で、ヨシヤ王の改革を大祭司ヒルキヤと共に推し進めた人物。そのときヨシヤ王は「律法の書」に聞き従って祭司・預言者ら主導の王制改革を進めたが、ヨヤキム王はエレミヤの「主の言葉の巻物」を破棄させたと、後段で描かれていく。

使徒書日課(Ⅱテモテ 3~4 章より)

・「テモテへの手紙二」は、使徒パウロがバルナバ宣教団から独立して自らの宣教団を組織した際にメンバーとして選び(使徒 16章)、その後、パウロの側近的な伝道者として協力関係を保ち続けたテモテに宛ててパウロが記したとされる書簡の一つ。現代の新約学者は、「手紙一」と共にパウロの真筆性を疑うが、教会史上早い段階で「パウロ書簡集」の中に収められ、パウロの真正書簡として読まれてきた。「手紙一」が、教会指導者としてのテモテに牧会上の具体的な助言を与える内容であるのに対して、「手紙二」は、異なる教えに惑わされずに、「聖書」に基づいて教えられてきたところに留まるように励ます内容となっている。

・「テモテ」は、「使徒言行録」16章によれば、ギリシア人の父とユダヤ人の母のもとに生まれた人で、パウロ宣教団に参画するにあたって初めて割礼を受けたとされている。彼の父親については詳細が知られていないが、母および祖母については名も伝えられ、彼女らが教会に加わっていたことで彼自身も幼少期から教会生活を送っていたことが明示されている(Ⅱテモ 1:5 など)。彼の母および祖母は、夫を亡くした「やもめ」として教会の世話になり、彼自身も、ギリシア人の父親の影響を受けずに信仰を育んだ、ということか。

・日課箇所は、著者パウロの聖書論(聖書観)が記されているが、ごく一般的な理解である上に、ユダヤ人であれば大前提となる「神の言葉としての聖書の絶対性」についても、譲歩的な記述となっている。ギリシア思想に基づく異なる教えに対峙させられていたテモテに対して、弁証的な聖書観を提示しようとしているのかもしれない。

福音書日課(マルコ 7 章より)

・日課箇所は、主イエスがファリサイ派の人々および律法学者たちとの間で「昔の人の言い伝え」に関して論争された逸話の前半で、続いて、この論争に関連する説明を群衆や弟子たちに向けて語られる場面が置かれている。「マタイ福音書」と「マルコ福音書」が並行して伝えているが、他の福音書は伝えていない。

・「マタイ」と「マルコ」は、この逸話について重要な異同なく並行して伝えているが、それぞれに独自の挿入句を置いている。「マタイ」は、(日課箇所ではないが)後半の弟子たちに向けた教えの冒頭に教訓的な譬えを置いているが(マタイ 15:12~14)、「マルコ」にはない。また、「マタイ」は、逸話の最後に、論争の端緒であった「手を洗わずに食事をする」ことについての見解を置いている(マタイ 15:20)が、「マルコ」には見られない。一方、「マルコ」は、逸話の冒頭で、ユダヤ人の「清め」の習慣についての説明を置いているが(マルコ 7:2~4)、これは「マタイ」には無い句である。同様に、「マルコ」は、宗教用語の「コルバン」をわざわざ取り上げて説明を付しているが、「マタイ」は、そのような回りくどい叙述はしていない。ヘブライ語「コルバン」は、旧約中、「レビ記」と「民数記」に集中的に用例があり「献げ物」または「供え物」と訳されている。

・「マルコ」の叙述からは、この逸話が実際に「律法」解釈の論争であったことを想像させられる。ファリサイ派の律法学者は、種々の戒め・掟を実践するにあたって整合性を持たせるために、一定の基準(昔の人の言い伝え!)に従って優先順位を付けた解釈を示していたと考えられるが、主イエスはそれをご都合主義として批判し、「神の言葉」に対する姿勢の誠実さを問われたのであろう。

来週の誕生日 (12月5日~11日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-229 番「いま来たりませ」(= II 96)は、M・ルターの作詞となっているが、原詞は4世紀のミラノ司教アンブロシウスのラテン語賛歌「Veni Redemptor gentium (おいでください、異邦人の救い主)」に基づく。曲も、アンブロシウスの賛歌に付けられたグレゴリオ聖歌を原曲にルターが編曲。ルター関わった最初の讚美歌集(1524年)に所収。
- ・21-241 番「来たりたまえわれらの主よ」は、「Swiss Noel (Noël Suisse)」という曲名で16世紀以来、スイス・フランス国境地方で歌われてきた「ノエル」のひとつ。フランス語圏では、降誕節に演じられた降誕劇のためにさまざまな「ノエル」が歌われてきた。
- ・21-79 番「みまえにわれらつどい」(= II 179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讚美讚美で、19世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。
- ・21-235 番「久しく待ちにし」は、211124 資料参照。

21-229「いま来たりませ」

Nun komm, der Heiden Heiland

1. Nun komm, der Heiden Heiland, / Der Jungfrauen Kind erkannt! / Dass sich wundre alle Welt, / Gott solch' Geburt ihm bestellt.
2. Nicht von Mann's Blut noch von Fleisch, / Allein von dem Heil'gen Geist / Ist Gott's Wort worden ein Mensch / Und blüht ein' Frucht Weibesfleisch.
3. Der Jungfrau Leib schwanger ward, / Doch blieb Keuschheit rein bewahrt, / Leucht't hervor manch' Tugend schön, / Gott da war in seinem Thron.
4. Er ging aus der Kammer sein, / Dem kön'glichen Saal so rein, / Gott von Art und Mensch ein Held, / Sein'n Weg er zu laufen eilt.
5. Sein Lauf kam vom Vater her / Und kehrt' wieder zum Vater, / Fuhr hinunter zu der Hoell' / Und wieder zu Gottes Stuhl.
6. Der du bist dem Vater gleich, / Führ' hinaus den Sieg im Fleisch, / Dass dein' ew'ge Gott'sgewalt / In uns das krank' Fleisch erhalt'.
7. Dein' Krippe glänzt hell und klar, / Die Nacht gibt ein neu Licht dar, / Dunkel mus nicht kommen drein, / Der Glaub' bleibt immer im Schein.
8. Lob sei Gott dem Vater g'tan, / Lob sei Gott sein'm ein'gen Sohn, / Lob sei Gott dem Heil'gen Geist / Immer und in Ewigkeit!

21-241「来たりたまえわれらの主よ」

O Dieu du clemens

1. O Dieu de clemence, / Viens par ta présence, / Comblent nos désirs, / Apaiser nos soupirs. Sauveur secourable, / Parais à nos yeux, / A l'homme coupable / Viens ouvrir les cieus ; / Céleste victime, / Ferme-lui l'abîme.
2. O bonté divine ! / Dieu vers nous s'incline ; / Du divin amour / Paraît enfin le jour. / Dans une humble étable Il va naître enfant, / Pauvre et misérable, / Dans le dénûment. / Heure d'espérance ! / C'est la délivrance !
3. Un dur esclavage / Fut notre partage : / De tout l'univers / Il vient briser les fers. / Loin de sa presence / Le péché s'enfuit, / Et par sa puissance / L'enfer est détruit ; / A tous sa naissance / Rendra l'innocence.
4. Gloire au divin Maître / Qui bientôt va naître ! / Que nos chants joyeux / Eclatent jusqu'aux cieus ! Que les chœurs des anges / Au divin séjour / Chantent les louanges / De ce Dieu d'amour ; / Et que par le monde / Toute voix réponde :

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.

Refrain:

- When I fall on my knees, / With my face to the rising sun, / O Lord, have mercy on me.
- Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
- Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]